

### 序 説

画像診断の進歩と健診・検診が普及するなかで臨床症状を呈さない、もしくはごく軽微であるが、将来的に致死性、悪性化ポテンシャルをもつ疾患が発見されるようになってきた。本誌の読者の過半を占めると思われる放射線診断医は日常診療のなかで、それらの疾患の初回診断は元より、数多くの症例の長期にわたる経過観察画像検査を毎日のように担当している現状がある。これらは致死性があるとはいえ、多くの場合その進行は緩徐であり、「前回と著変なし」という所見が長期間継続する。

教科書や雑誌の特集とした場合、臓器別になりやすい。その領域を専門とする医師の間では常識となっていることや経過観察の要点に関しても、専門外となると多忙な日常のなかでそのアップデートが難しくなる。そのため、近年ガイドラインなどの整備が進んだ長期経過観察を要するこれらの疾患を臓器横断的に疾患概念、一般的検査法、画像所見、経過観察、治療などを解説することを目的として本特集を企画した。

その代表のcommon diseaseとして、肺のすりガラス型結節の診断とマネジメントを国立がん研究センター中央病院 放射線診断科 渡辺裕一先生に、慢性間質性肺炎の診断とマネジメントを奈良県立医科大学 放射線診断・IVR学講座 山田 彩先生らに、膵IPMNの診断とマネジメントを金沢大学附属病院 放射線科の小森隆弘先生に解説いただいた。いずれの原稿も誌面に合わせコンパクトに要点をおさえた、非常にわかりやすいものであり、日々の画像診断に則した内容であることには大変感銘を受けた。限られた時間のなかで執筆いただいたことに深謝する。

本特集が、読者の方々の各種疾患の経過観察を含む画像診断に役立つことを願っている。

竹中大祐